

文学の読み方…「読みの技術」「文学の楽しみ方」

明治図書「国語教育より一部抜粋」

① 構成をとらえる技術

- ◇ 題名の意味を考える。
- ◇ **設定（時・人・場）**を明らかにする。
- ◇ 全体構成（冒頭―発端―山場のはじまり―クライマックス―結末―終わり、起承転結）を明らかにする。特に**事件や人物の転換点**に着目する。
- ◇ 場面に分けて、事件や筋（伏線）をとらえる。

② 表現をとらえる技術

- ◇ **類比（反復）と対比の関係**を捉える。
- ◇ **イメージ語**（視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚）、**色彩語**、**比喩**（直喩・暗喩・擬人法など）、**声喩**、**象徴**、**倒置法**、**省略法**、**誇張法**などの効果を明らかにする。
- ◇ 描写、説明、会話、叙事、表明の効果を明らかにする。
- ◇ 文字表記、句読点、区切り符号（ダッシュ・リーダーなど）、字配り、字形などの効果を明らかにする。
- ◇ 韻律の効果を明らかにする。

③ 視点をとらえる技術

- ◇ 作者と**話者（語り手）**を区別する。
- ◇ 内の目（主観視点）と外の目（客観視点）を区別する。
- ◇ 同化体験（人物の気持ちになる）と異化体験（人物を外から眺める）、共同体験（両者の混合）を成立させる。
- ◇ 一人称視点と三人称視点の効果を明らかにする。
- ◇ 視点人物と対象人物、視点の転換などを捉える。

④ 人物をとらえる技術

- ◇ 中心人物（主役と対役）をとらえる。
- ◇ 人物描写などから人物像や心情を捉える。
- ◇ **中心人物の人物像の変化や心の転換点をとらえる。**
- ◇ 人物の姓名・呼称の意味を考える。
- ◇ 人物を典型としてとらえる。

⑤ 文体をとらえる技術

- ◇ **話者の語り口の特徴をとらえる。**
- ◇ 話法（直接話法・間接話法など）を明らかにする。
- ◇ 文末表現、余情表現、常体と敬体、文の長さなどの効果を明らかにする。
- ◇ 作調（明暗・喜劇・悲劇・叙情・感傷・風刺・ユーモア・アイロニー・パラドックスなど）を明らかにする。

※ 太字は、この論文の筆者が小学校段階で発達段階から考えて、大切にしたいと提起している内容

※ 上の内容は、20年ほど前の明治図書発行「国語教育」に掲載されていたものです。しかし、その一部だけをコピーして保存していたものですから、筆者や「国語教育」のバックナンバーなどは不明です。（東田明治）

私の教材研究の仕方 (東田明治)

私はもともと国語科特に文学作品の読みは大の苦手でした。小・中・高の文学の授業などで同級生が発表しているのを聞くと、どうしてあんなことが発表できるのかわけがわかりませんでした。どうもその方面の感覚が私には備わっていないように思われました。

ですから、わたしの文学の勉強は教師になって始まりました。あまり積極的な勉強でなく、先輩達のお話を聞くなかで少しずつ興味を持って行きました。

中でも尊敬する先輩の先生が紹介して下さった西郷竹彦氏の「文芸理論」の本が私にはよく理解できました。そんな私ですので、今でも文学には多少の劣等感を持っています。そんなわけですので、文学の指導があまり得意でない方、私の教材研究法を参考にしてください。

◇ 読みの観点ごとに作品を読む

文学の苦手な私でしたので、最初のうちは読みの観点ごとに作品を読むように心がけました。

例えば、「**類比(反復)と対比の関係を捉える。**」という観点から一つの作品を読みとおします。そこで、気付いたことをチェックすると、次に、「**イメージ語、色彩語、比喩**」などの観点で作品を読みなおします。さらに、「**事件や人物の転換点**」に注意してもう一度読みなおします。

先の「文学の読み方」のすべての観点から教材研究を進めるのは大変なことです。それに一つ一つの観点にはそれぞれの理論が存在するのですから専門家でない者には到底無理な話です。いくつかの観点を選ぶ必要があるでしょう。

どの観点が大切かいろいろな議論があるのですが、さしあたって、先の「文学の読み方」の太字の部分が参考になると思います。但し、私は⑤の「**話者の語り口の特徴をとらえる。**」はよくわかりませんので、重視していません。また、私の経験上、太字以外にも大切にしていることがいくつかあります。文末表現、同化体験・異化体験などです。

◇ 子どもの発達や学習段階に合わせて授業を組み立てる。

それらの作業をやり終えた後、その作品で大切と思われること(作品の特徴)、学習指導要領に照らして重要と思われること、子どもの発達段階から考えて大切と思われること、その学級の学習段階に照らして重要と思われることを考えて授業を構成していきます。

◇ 学習指導要領を参考にする。

私はあまり学習指導要領に興味がありませんでした。7・8年前(54・5才頃)に転勤先の学校が研究指定校を受けていて(2年間の初年度)、研究の方向性を打ち出すために学習指導要領(国語)と国語科の解説書を分析しました。表や図に整理してみますと、私が体験的に大切にしてきたことと基本的に合致していることに驚きました。

もちろん、すべてではありませんし、不十分な部分もあると感じました。特に文学に関わって4年生以下の「**気持ち**」の読みが以前の指導要領から削除されていたことは決定的な誤りだと感じました。おまけに、研究の指導に来て下さった大学教授は国語科の専門家でありながら、「文学の読みは『**気持ち、気持ちと**』**気持ち悪い**』と言いつつ始末でした。その指導は一定の障害となり迷惑な話でしたが、できるだけ無視しながら研究を続けました。20年の新しい学習指導要領では、当然「**気持ち**」の読みが復活しました。

私は、このことから2つのことを学びました。1つは、大学教授に「文学の読みは『**気持ち、気持ちと**』**気持ち悪い**』と言いつつ現場の授業のあり方についてです。おそらく文学の読みは「**気持ち**」さえ読んでおけばいいという安易な授業が横行していたのでしょう。小学校では文学の読みを通じて、作品を豊かに読むことはもちろん大切ですが、同時に学習指導要領に示されているように「**言語感覚(言語の使い方の正誤、適否、美醜などの鋭い感覚)**」や「**思考力・想像力(言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力)**」、さらに、「**伝えあう力**」を育てることが必要です。2つめは、大学教授の質の低さでした。しかし、肩書きがものを言いますので、現場には一定の影響力を及ぼします。この教授は「**気持ちの読み**」ではない外国の読み方を提起したのですが、それは授業の科学から程遠いものでした。家で作品をよく読んでこさせ、翌日その記憶をためすというたぐいの指導法です。「**主人公の妹の名前は何でしょう。**」とか「**〇〇の年齢は何歳ですか。**」という類いです。作品を繰り返して読めば国語力はつくだろうという考え方です。

話題がそれでしたが、学習指導要領は大切な参考資料になります。発達理論や文芸理論から見てどうなのかという観点で絶えず点検する必要がありますが。